

上記の表題で、昨日の『週刊金曜日』の投書欄に掲載された。7月7日のホームページで「言葉の真実」と題して書いたが、簡略化されたので、もう一度書きたい。

人間は言葉を介して、他者との交流を計り、文化を継承し、歴史を積み重ねる。そこでは、「言葉が真実である」ことが求められる。「言葉の真実」が失われる時、偽りが横行し、関係性が崩れ、秩序が崩壊する。昨今の政治家たちの間で、言葉が自分たちに都合よく、逆転した形で使われていることに強い危惧を抱いている。

「積極的平和主義」は、その最たる言葉である。本来、「平和学」では貧困、差別、抑圧をなくして平和を構築することをいう。しかし、安倍晋三政権の「積極的平和主義」は、真逆で、武力による解決を目指すものである。かつての「大東亜共栄圏」や「五族協和」と同じ響きである。安易に「平和」「安全」と言うが、真の平和からはほど遠く、安全とはかけ離れている。

憲法審査会で、3人の憲法学者が集団的自衛権行使は「憲法違反」であると発言した。憲法学者たちの中に、自衛の権利は国際的に認められ、それは個別的自衛権と集団的自衛権を含むと言う人が複数人いるらしい。だが大半は、集団的自衛権は「憲法違反であり、疑わしい」としている。憲法第9条の条文からも、この指摘は妥当と言えよう。

自衛隊の海外派遣には厳しい歯止めがかかっていると言うが、安保法案が法制化されると、時の政府の判断によって、自衛隊の海外での武力行使はどこでも、いつでも行なえるようになってしまう。現政権は「国際環境が変わった」と、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）や、中国との関係悪化を口にする。これ自体も、そもそもは現政権が招いていることではないか。日本軍「慰安婦」に関する史実をねじ曲げることなく謝罪し、また、“聖戦”を煽った靖国神社との関係を断ち切れれば、やがて、近隣国とも良好な関係が修復できるであろう。

現在は、言葉が支離滅裂に飛び交い、いたずらに危機を増幅している。書かれた文字、語られた言葉に責任を負うことが文化であり、それが未来を切り開いていく。第9条の文言をそのままに、自衛隊を海外に派遣すれば、条文は空洞化し、内実を失う。つまり、「言葉の真実」が抹殺されることを意味する。そうした社会では、「虚無」が醸成される。この虚無は、やがて文化を腐らせる。人は言葉によって立ちますれば、倒れもする。「言葉の真実」を取り戻すことが、市民の責任ではないか。

私は牧師であるから、世界観やイデオロギーではなく、聖書に立脚して、物を見、考え、発言したいと思っている。それはまず、言葉の真実を信じ、守ることである。そして、キリストの福音はどこまでも「人間、文化、歴史」に焦点を合わせている。人間の尊厳が守られ、共生文化が構築され、歴史に展望を持つことである。最近の論文や書物は社会で起こっている出来事を分析、評論する傾向が強く、表面的な情報に流されているように思える。「人間、文化、歴史」を捉える深みに欠ける。出来事が生身の人間にどのように関わっているかを歴史の中で位置づけていくことによって、変革の幻が見えてくるのではないか。「日本を取り戻す」と、空しい言葉を並べるところには共生文化（平和）は生まれない。「言葉の真実を取り戻す」責任ある人間になるところでこそ明日の歴史が切り開かれていく。